

【私たちがパブリックであり続けるためには】

熊倉／最後に答えにくい質問をお二人にして終わりたいと思います。大川さんや井上さんのようなある意味では一人のコレクターであり、志があり、それを公に実現しようとした人がいた時代と、今のようにそれがなかなかし得なくなった時代のなかに、私たち普通の市民や県民は、もっとパブリックなことを続けていけるだろうか。できることと思いと悩みと志とをパブリックに続けていけるだろうか。ということです。

奈良／人が本当にパブリックな意味でやろうとしたときに、支えてくれるかぐれないか、それから影で応援してくれるかぐれないか、公共というものに対するものの見方はやはり、日本は相当弱いのではないかという気がします。日本の政治風土が、歴史、美術などもっと気軽に話が出来るようになれば、おそらく土壌が変わったというようになるのだと思います。芸術は国境を越えて理解ができるわけですから。そういう面では日本の土壌を変える一歩になれば、と。大川美術館はそういう役目をおそらく果たすことが目的だったんだろう、と思います。

熊倉／美術館のひとつの大きな役割として、作品や創設者の思いもさることながら、美術館として生きていくことの中には人々が繋がって、痛みを分かち合えるとか、文化やものを共有しあえる、もう一歩前に進むという気持ちになれるような空間、装置でなければ、美術館にしろ、いろんな公共の施設の価値が薄れてしまうんだらうな、と思います。それをつくり続けることが多分大川さんの話を継ぐ事でもある、井上さんの話を繋いでいく事だと思いました。

奈良／小池さんの話の補足をちょっとしていいですか。大川さんは「俺は芭蕉の小池魚心の精神は理解できない、理解できないから大川美術館で展覧会ができないんだ」と言っていた。つまり、大川さんは自分で理解出来たら、自分が理解できるように成長すれば、小池魚心の精神が分かるようになれば、そこではじめて展覧会をしたい、ということをやっていたことがありました。小池魚心の理解まではいかなかった、俺ごときがまだ無理だよ、ということだったのだと思います。

【次世代への視点】

山鹿／井上先生は若い人を多く育てていた。桐生の彫刻家に、和南城孝志（1949-2003）、森亮太（1952-1993）、氏家慶二（1951-）がいましたが、井上先生は常に若い人を育てているそんな姿が見えていましたね。

熊倉／大川さんはその点どうですか？作家を育てる、という意味では。

奈良／作家は育てていないな。育てていたというならばそれは直接というよりは間接しかないと思います。若い人と一緒になって、という井上さんのようなタイプではなかったと思います。ただ、大川美術館が出来たあとに、友の会が出来ましたが、友の会のバス旅行には同乗され、大川さん自らが解説されました。また、子供たちにどういう影響を与えるかを考えておられた。小中学生や高校生を桐生市の教育委員会と協力して授業の一環として積極的に大川美術館に受け入れて来た。「俺の夢は子どもたちが大人になった時に、大川美術館で気に入った絵が一枚でも見つかったという記憶を持っていてくれればこんなに幸せなことはない」と言っていました。来館した子どもたちに希望を託した。そういう意味では、井上先生が若い青年たちを育てたこととそう変わらないのではと思います。

熊倉／それぞれの生きて来た営み。どこで一番感動し、自分が何をやりたかったか、ということに繋がってくるのかもしれませんがね。井上さんの場合、旧制中学から高校に進学という時が、後輩たちを含めて一番思いが強かったのかもしれませんが。それに対して、大川さんはずっと子供へという視点だった。それはやっぱり松本竣介なのかもしれない。でも井上さんが自分自身の青年期のことと若者に対する関わりと、大川さんが病床から生き返って松本竣介の作品を見て、自分が魅せられていく、という、そういう原点は意外に最後まで生きるのかもしれないですね。

今日はお二人から非常に面白い有意義なお話を頂きました。ありがとうございました。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（編集：小此木美代子）

夏休みイベント 報告

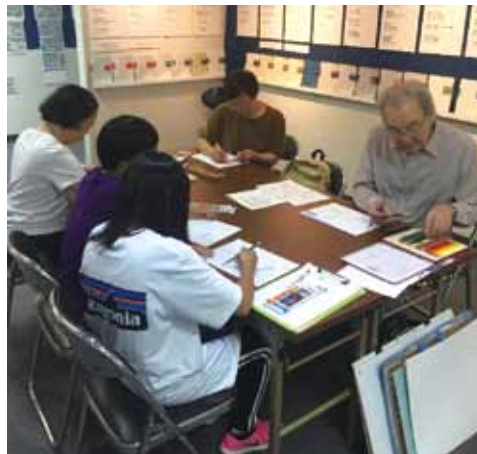
池田寛子

今年の夏休みは、毎日ギャラリートーク！ということで、8月10日～8月25日の開館日午前中に毎回ギャラリートークを開催しました。普段あまり美術館に行かないという親子や、夏休みに合わせ初めて大川美術館に来ました、という遠方からの来館者が多いこの時期。「学芸員さんの説明があったことでより興味を持って鑑賞することができました」と好評を頂いた今回のギャラリートークには、のべ100人を超える方々にご参加いただきました。

開館30周年の年であるとともに、開催していた企画展「大川美術館ベストコレクション」では「大川栄二のことば」として、何点かの作品に対して美術館創設者である大川栄二のことばを添えて展示していたこともあり、ギャラリートークでは大川氏についてや大川美術館の成り立ちについても解説したところ、何回か来ている方からも、「知らなかったことがたくさんあって楽しかったです。」と感想をいただきました。



もう一つ、夏休み中のイベントとして「模写の会」を開催いたしました。8月10日、11日の二日間、午後いっぱいをつかって展示されている作品の中から好きな作品を選び自由に模写をするイベントです。講師は桐生市在住の画家渡邊保さん。参加者はまず渡邊さんのお話を聞き、ウォーミングアップの色塗りをすることで、そっくりに描くのではなく、のびのびと自由に描く気持ちをつくりました。



普段から絵を描いているという60代男性や幼稚園の女の子まで、幅広い年代が参加し、最後にはそれぞれの作品を講評し合いました。



ただ作品を観るだけでは気づかない部分が、ギャラリートークを聞いたり模写してみたりすることで見えてきます。さらに他の人の感想や模写作品をみることで同じものを見ていてもいろんな見方・感じ方があるのだと気づくことができ、鑑賞がより深まったのではないのでしょうか。

(大川美術館 学芸員)

特集展示のご案内

秋の実りと曾宮一念

2019年10月22日(火)～12月8日(日)

展示室 5

現在大川美術館では、秋の季節にふさわしい作品によって「特集展示 秋の実りと曾宮一念」を開催しています。

当館に収蔵される89点におよぶ曾宮一念(1893～1994)作品のうち84点は、1995(平成7)年、曾宮一念ご遺族(長女・曾宮夕見氏)より寄贈されたものです。東京美術学校入学当時の油彩画から、中村彝(1887-1924)に兄事し下落合にアトリエを構えた時代を経て、戦後富士宮市に居を定め各地を旅して描いた素描作品群の充実ぶりは、当館の曾宮一念コレクションの特徴といえます。これら素描作品について大川栄二は、「私にとって油彩以上に曾宮芸術の頂点を示し、彼だけの飄逸すら感じる幽玄な大自然」(1996年4月開催の「動の詩情 曾宮一念・遺作展」カタログより)と評しました。

本展では、「風景の画家」と呼ばれた曾宮一念のおもに50歳代後半から60歳代の作品を中心として、78歳の折、眼病により両眼を失明し画業を廃業する直前までの素描作品を紹介しています。

曾宮は1950年代より、桜島や阿蘇の風景に魅せられ毎年のように九州の地を訪れ、また群馬や長野にも旅し、浅間や上高地の焼岳などの火山を描いています。「火の山には絵画的な美しさも見られる」(「火山の美」『曾宮一念 火の山巡礼』大沢健一編、木耳社、1989年)といい、しばしば溶岩や噴煙、山肌、驟雨の空などを画題としました。天性の色彩感覚とともに力強いびやかな筆致によって独自の画境を示します。ことに眼前の風景の変化を素早く力強いタッチであらわした素描作品には、詩歌に触れるような滋味深さがたぐよいます。ここに紹介した《阿蘇噴煙》の大胆な色彩、そのいっばうで燻る空気がそのままコンテの黒に定着したような《桜島 南岳》などモノトーンの小品、線描の密度の高い《洋上驟雨》など、その素描は表情豊かです。

曾宮はのちに「感動と画面の構成とうまく結び合う物にぶつかれば収穫である。同じ風景でも時によって眠ったり、乾いたり、あせたり、時には生々とし艶々と、駆け、怒鳴り、泣いたりもする。半ばは見る方の気持であるのだが、この風景の表現に没頭すると絵画そのものが消えてしまうし、絵画に純粹になり切ると風景の呼吸は亡くなる。」

(「旅と画家」『日曜随筆家』創文社、1962年)と語っています。本展では、曾宮ならではのまさにその呼吸をご覧いただけることでしょう。

今回は、戦前、下落合に暮らした曾宮と松本竣介の一時期の交流についても資料をまじえて紹介しています。企画展「松本竣介 街歩きの時間」とあわせておたのしみください。(小此木)



曾宮一念《阿蘇噴煙》1950年頃 パステル・紙



曾宮一念《桜島 南岳》1955年頃 コンテ・紙



曾宮一念《洋上驟雨》1967年頃 鉛筆、水彩・紙